

岩手県の沿岸部における菌根性食用きのこショウウロの発生

1 はじめに

ショウウロはマツと共生する菌根菌で、主に砂地で生育する。子実体は食感に優れ、西日本の海岸地帯が産地として有名であるが、その発生量は減少している。東北地方でも宮城県などで発生が報告されているが、岩手県内の発生状況は不明である。そこで、岩手県沿岸部で発生地の確認と発生経過および発生環境の調査を行った。

2 調査地と方法

2003年5月～7月に、角浜（九戸郡洋野町、以下同）八木、有家、北侍浜（久慈市）十府ヶ浦（九戸郡野田村）普代浜（下閉伊郡普代村）北山浜（下閉伊郡田野畑村、以下同）机浜、平井賀浜、島越、吉浜（大船渡市）高田松原（陸前高田市）の12箇所で、子実体の発生状況を調査した。子実体の発生が確認された場所では、2010年6月にも調査と菌の分離を行った。

3 結果

2003年の調査でショウウロの発生が確認された場所は高田松原のみであった。高田松原では、クロマツ人工林内の3箇所で、ショウウロの子実体を確認した（写真1右）。最も発生量の多かった調査区Aでは、4.2m×2.4mの範囲に12個の子実体が発生していた（写真2）。子実体はいずれもクロマツの樹冠下で確認され、その直下には外生菌根が形成されていた。2010年の調査では、この調査区で子実体が1個確認され、約10m離れた場所（調査区B）でも、24個の子実体を確認された（写真1右、図）。調査区AのA₀層の厚さは2003年に平均10mm未満であったのに対し、2010年は平均12.3mmと厚くなっていた。一方、同年に調査区Bでは平均9.1mmであった。また、2010年に各調査区でA₀層の組成を比較したところ（写真3、図）、調査区Aでは腐植層が形成されていたのに対し、調査区Bでは落葉層のみであった。層の厚さや組成の変化が子実体の発生に影響を及ぼすことが示唆された。

4 おわりに

今回の震災で高田松原の調査地も津波の影響を受けたが、発生地で採取された菌株は保存されている。砂地におけるマツ類樹木と菌根菌の共生関係は、海岸林復旧に資する可能性があるため、今後は保存菌株の利用技術等について検討したい。



写真1. 高田松原と発生地(調査区B)
*赤線内は子実体が発生した範囲



写真2. 採取した子実体(2003)



調査区A 調査区B

写真3. 地表の比較(2010)

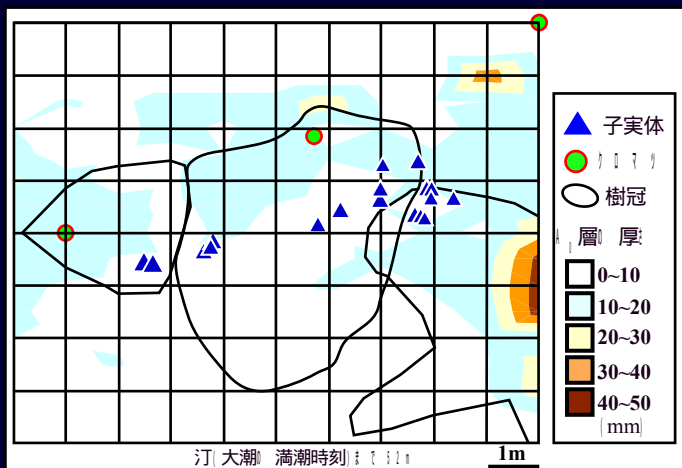


図. 子実体の発生位置とA₀層の厚さ(調査区B)

(主査林業普及指導員 成松 眞樹)

連絡先

028-3623 岩手県紫波郡矢巾町大字煙山第3地割560番地11
岩手県林業技術センター
ホームページアドレス

TEL 019-697-1536

FAX 019-697-1410

<http://www.pref.iwate.jp/~hp1017/>